自己概念の測定法に関する研究の概観

——体系化の試みと新モデルの提示——

教育心理学研究室　保　坂　　亨

An Overview of Studies about Measuring the Self-Concept

—An Attempt of Systematization and a Proposal of a New Model of Measurement—

Toru HOSAKA

The purpose of this article is to overview a lot of studies about measuring the self-concept and to arrange many measures. Furthermore, on the basis of them, systematization of these measures (Questionnaire, SD method, Check List, SCT) is attempted and a new model is proposed.

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．各測定法の整理
　A．質問紙法
　B．Q分類法
　C．SD 法
　D．チェック・リスト法
　E．文章完成法
Ⅲ．測定法の比較研究
Ⅳ．因子分析的研究の比較
Ⅴ．各測定法の位置づけ
Ⅵ．考　察

Ⅰ．はじめに

自己概念[1]を測定する方法として，多くの研究者が，さまざまなものを考案し，使用している。これらの個々の測定法の妥当性・信頼性の検討が必要なことはいうまでもないが，さらに進んで，堀尾（1981）が指摘するように各測定法の整理，比較検討および体系化が，現在望まれていることであろう。そうしたことなしに，さまざまな測定法による結果だけを特較して，議論を進めていくことは問題があるといわざるをえない。

したがって，ここでは，各測定法を整理したうえで，従来のいくつかの測定法の比較研究と，因子分析的研究などをもとにして，各測定法の位置づけを考えてみたい。

Ⅱ．各測定法の整理

さまざまな自己概念の測定法は，大きく以下の５つに分けることができる。まず，それらの内容および問題などについて簡単に述べておく。

A．質問紙法

「私は責任感がある」というような項目について，それぞれ自分にあてはまるか否か，（似ているか否か）を５段階，あるいは７段階で評定させるものである。項目数・内容は，研究者によってさまざまであるが（Worchel ら（1963），Kahl ら（1980）など），Fitz らの作成した Tennessee Self Concept Scale（Crites（1965），Vacciano ら（1968）など）や，Coopersmith（1959）の作成した Coopersmith Self-Esteem Inventory（Katz & Zigler（1967），Kokens（1974）など）あたりが比較的多く用いられているようである。我国でも，斉藤（1959）や水野（1976）らをはじめとして，多くの研究者がそれぞれ独自のものを使用している。

Wylie（1974）が指摘するように，この種の質問紙は

数多く考案されているが，ほとんどごく少数の限られた研究者（多くは考案者のみ）によってしか用いられておらず，項目選択の方法や，スコアリングの仕方などが不明確なものが多い。また，そこで測定の対象となっているものが，自己概念（self-concept）であったり，自尊感情（self-esteem）や自己受容（self-acceptance）であったり，用語や内容もさまざまなまま統一されていない。

B．Q分類法

Stephenson の考えをもとに，Butler & Haigh（1954）が考案した100項目の自己記述カードが数多く使用され，現象的自己の研究がなされている。この方法は，「私は人づきあいがよい。」などと書かれた100枚の自己記述カードを，自分に「最も似ている」から「最も似ていない」にいたる9段階に，正規分布曲線によってあらかじめ決められた枚数[2]に従って分類していくものである。これによって，現在の自分に似ている，似ていないという規準で分類していく現実的自己像と，自分の理想像に似ている。似ていないという規準で分類していく理想的自己像を描き，両者の相関係数をとって適応の指標とする研究が多くみられる。（Turner & Vanderlippe(1958), Williams（1962）など），また，Caplan（1957）や Engel（1959）をはじめとして，独自の項目を作成し，同じような手続きで使用しているものも多い。

我国では，佐治ら（1957）によって，同様な100項目の自己記述カードが作成され，同じ手続きで研究がなされている。（佐治，(1961)など）しかし，その項目をそのまま使用している研究（小島ら(1972)，保坂（1981）など）は少なく，多くは，それぞれ独自の項目を使用しているのが現状である。（佐藤（1968），藤原（1969）など）

この方法は，具体的な項目によって現象的自己像がとられるという利点を持つ反面，質問紙法や SD 法，チェック・リスト法などにくらべると，手続きが複雑で時間がかかり，多くのデータをえることはむずかしい。また，Cronbach ら（1953）によって提起された「強制分類によってかえって情報が失なわれてしまうのではないか。」という疑問も，Block（1956），Jones（1956）らの研究者たちによって問題としてとりあげられているが，（Q 分類法支持：Block，不支持：Jones），解決しているとはいいがたい。

（なお，このQ分類法は，項目の評定方法に強制的な枠組みを与えたものであり，その意味では，質問紙法の変形と考えることができる。したがって，以下の考察においては，質問紙法の一種に含めて特にとりあげないことにする。）

C．SD 法

Osgood らによって，本来ことばの内包的意味を客観的・数量的に測定する目的で考え出された方法であるが，自己概念の測定にも同様に使用されている。アメリカでは，Joregnson & Howell（1969）や，Flaherty & Dusek（1980）など，多くの研究者が独自のスケールを使用している場合が多いが，我国では，長島ら（1966）が作成した Self-differential 法が数多く使用されている。（東（1975），砂田（1979）など。）

この方法は，質問紙法やチェック・リスト法と同様に，実施が手軽であり，使いやすいが，自己概念という内面的なものを「強い―弱い」といった単なる形容詞対でどこまで測定しているか，という内容的妥当性への疑問が持たれる。

D．チェック・リスト法

Bills; Vance & McLean(1951) の作成した Bills Index of Adjustment and Values が代表的なもので，多くの研究者によって使用されている。(Cowen & Tongas(1959), Meddinus & Curtis（1963）など)。この方法は，49の形容詞について，以下の3つのコラムを5段階で評定させていくものである。

コラム1：自分にあてはまるか，否か，（現実自己）
コラム2：1のそれぞれの点についてどう思うか。すなわち，好きか嫌いか。（自己受容）
コラム3：現想とする自分にあてはまるか，否か。（理想自己）

その結果，コラム1（現実自己）とコラム3（理想自己）の差が適応の指標としてコラム2が自己受容の指標として用いられる[3]。また，この他に，LaForge & Suczek（1955）の Interpersonal Check List や，Gough（1960）の Adjective Check List などが用いられている。（Altrocchi; Parsons & Dickoff（1960），Hess & Bradshow（1970)など。）我国では加藤（1977，1980）が，Gough の方法をもとにして同様なチェック・リスト法を使った研究を行なっているが，こうした方法を用いている研究は他にはあまりみられない。

この方法は，形容詞の社会的望ましさの影響などに問題があると言われているが，Strong & Feder(1961) は，因子構造など個々の項目を質的に評価する構造がない，また，段階評定など個人にとっての項目へのかかわり具合を決定する方法がない，という理由から，このチェック・リスト法よりも質問紙法を支持している。

E．文章完成法

これは，「Who are you?」あるいは，「Who am I?」といった形の質問に自由に答えてもらうことによって，被験者の自己激念を知ろうとする方法である。「将来の私は（　　）。」といったようなさまざまな形を使った研究（Coleman; Herzberg & Morris (1977) など）もあるが，Kuhn & McPortland (1954) の提唱した20答法（「Who are you?」という質問に20通りの異なる答えを書かせる方法）が広く用いられている。(Bugental & Zelen (1964), Montemayor & Eisen (1677) など。) 我国でも，この20答法が星野 (1958) によって紹介されて以来，多くの研究で使用されている。(菊地 (1970), 芳川 (1982) など。) また，20答法に限らず，Coleman らのように自由な文章完成法の形（たとえば，「私のからだは（　　）。」など）を使った研者も多い，(村瀬ら (1974), 杉浦 (1974) など), 吉川 (1960) のように，「私」という題名で書かせた作文を分析した方法なども含めて，これらのものはすべていわば文章完成法を使って，被験者の自由な記述から，自己概念を測定しようとするものである。

この方法では，被験者は，自由に自分を表現できるので，内容豊かな資料を得られるが，反面，そうした内容の評価や意味づけなど結果を解釈するうえでの困難が指摘されている。

以上のように，実にさまざまな測定法が多くの研究者によって，個々ばらばらに使用されているのが現状である。しかるに，こうした測定法間の特較研究はきわめて少ない。以下に，それらの研究をみていくことにする。

Ⅲ．測定法の比較研究

いくつかの測定法の比較をした研究の結果をまとめて表1に掲げる。

表1をみると，質問紙法，Q分類法，SD 法，チェック・リスト法などの測定法間の相関係数は，いずれも，.40～.69の有意な高い値を示している。しかし，同時にこれらの値がすべて，一方が他方の全分散の50%以上を説明しうるほど高くないことに注意しなければならない。このことからみても，これらの測定法については，そのちがいを比較し，体系化する視点を持って検討していくことが必要と考えられる。

Ⅳ．因子分析的研究の比較

従来のいくつかの自己概念の因子分析的研究のうち，

表1　〔　〕内は被験者

Strong (1962)〔大学生，男〕	
測定法	① チェック・リスト法：The Bills Index of Adjustment and Values
	② Q分類法：Butler-Haigh Q sort
	③ 質問紙法：Worchel Self-Activity Inventory
測定値	理想自己と現実自己の差
結　果	①：②=.62
	①：③=.60
	②：③=.58
Achenbach ら (1963)〔社会人，男女〕	
測定法	① 質問紙法：Murry のものをもとに独自に考案
	② チェッ・リスト法：Allport & Odbert のものをもとに独自に考案
測定値	理想自己と現実自己の差
結　果	①：②=.52
Winkler ら (1963)〔大学生，男女〕	
測定法	① Q分類法：Butler-Haigh Q sort
	② チェック・リスト法：The Bills Index of Adjustment and Values
測定値	理想自己と現実自己の差
結　果	①：②=.57
Katz ら (1967)〔小・中・高校生，男女〕	
測定法	① 質問紙法：Coopersmith のものをもとに独自に考案
	② チェック・リスト法：独自のものを考案
測定値	理想自己と現実自己の差
結　果	①：②=.69
Zigler ら (1972)〔小・中・高校生，男〕	
測定法	① 質問紙法：Katz ら (1967) に同じ
	② チェック・リスト法：　〃
測定値	理想自己と現実自己の差
結　果	①：②=.40
保坂 (1982)〔大学生・社会人，男〕	
測定法	① 質問紙法：佐治らのものをもとに独自に考案
	② SD 法：長島らの Self-Differential 法
測定値	現実自己と友人自己の差
結　果	①：②=.60

青年期以上の被験者を中心としたものを，質問紙法と SD 法，チェック・リスト法に分けて表2に掲げる[4]。

表2をみると，因子分析があくまでその項目群に制約されるといわれる通り，いくつかの独自的な因子（保坂

表2　因子分析的研究[5)]

<質問紙法>	<SD法・チェックリスト法>
◦Vacchiano (1968)〔大学生，男女〕	◦Smith (1962)〔成人，男〕
Ⅰ 家族の不調和 (Not loved by family, Family doesn't trust me)	Ⅰ 自信 (Success-Failure, Useful-Useless, Happy-Sad)
Ⅱ 理想的家族関係 (Should love family more, Treat parents as should)	Ⅱ 社会的価値 (Kind-Cruel, Nice-Awful, Bad-Good)
Ⅲ 個人的価値への態度 (I am friendly person, I am cheerful person)	Ⅲ 肥大: Corpulence (Heavy-Light, Underweight-Overweight, Big-Little)
Ⅳ 個人的価値の欠如 (Smart as want to be, Nice as should be)	Ⅳ 潜在力 (Strong-Weak, Rugged-Delicate, Hard-Soft)
Ⅴ 肉体的健康 (Full of aches and pains(−), I am a sick person(−))	Ⅴ 独立 (Leader-Follower, Sharp-Dull, Popular-Unpopular)
Ⅵ 自信 (Act without thinking, Calm and easy going)	Ⅵ 緊張－不快 (Sick-Healthy, Tired-Refreshed, Afraid-Unafraid)
◦水野 (1976)〔大学生，男女〕	◦長島ら (1966)〔大学生，男女〕
Ⅰ 社会的承認 (人が自分をどう自るかが気になる)	Ⅰ 外向性 (外向的な—内向的な，おしゃべりな—無口な)
Ⅱ 自己確信 (価値ある人間と感じる。自分の能力への自信)	Ⅱ 情緒安定性 (丸い—角のある，暖かい—冷たい)
◦梶田 (1980)〔高校生・大学生，男女〕	Ⅲ 強靱性 (臆病な—勇敢な，弱々しい—たくましい)
Ⅰ 自信 (自分の主張を通す。自分に自信をもっている)	Ⅳ 誠実性 (誠実な—不誠実な，まじめな—ふまじめな)
Ⅱ 優越感 (人より劣っていると感じる(−)。能力などの点ですぐれている)	Ⅴ 過敏性 (病弱な—元気な，不安定な—安定な)
Ⅲ 自己受容 (今のままの自分ではいけない(−)，現在の自分に満足)	Ⅵ 理知性 (理性的な—感情的な，冷静な—情熱的な)
Ⅳ 自己防衛性 (自分が傷つくのを恐れる，うわさが気になる)	◦中西ら (1978)〔中学生・高校生・大学生，男〕
Ⅴ 自己への素直さ (人とうまくつきあえる，人から好かれていたい)	Ⅰ 誠実性 (おちつきのある—おちつきのない，怠情な—勤勉な)
◦保坂 (1982)〔大学生・社会人，男〕	Ⅱ 社会・昂揚性 (不潔な—清潔な，陰気な—陽気な)
Ⅰ 自己不安 (自分の心が不安だと感じる，自分がたよりにならない)	Ⅲ 自己充足・気転性 (不親切な—親切な，思いやりのある—ない)
Ⅱ 対人関係 (人をひきつける人柄を持っている，人から好かれやすい)	◦高木ら (1979)〔中学生・高校生・大学生，男女〕
Ⅲ 責任感(自分の問題に対して自分で責任を感じる)	Ⅰ 反社会性 (怠情な，無作法な，反抗的な)
Ⅳ 優越感 (人の上に立つのが好きだ，他人の事に批判的である)	Ⅱ 意欲性・活動性 (統率力がある，依存的な(−)，自主的な)
Ⅴ 絶望・無力 (希望がない。絶望だ)	Ⅲ きちょう面さ，清潔さ (規律正しい，勤勉な，冷静な)
	Ⅳ 明朗性・友好性 (にこやかな，うちとけない(−)，無邪気な)
	Ⅴ 情緒性 (悲観的な，情熱的な，思い悩む)
	Ⅵ 誠実さ (親切な，責任感が強い，すなおな)

の第Ⅴ因子：絶望・無力，Smithの第Ⅲ因子：肥大，長島らの第Ⅳ因子：理知性）がみられる。が，やはり，質問紙法と，SD法，チェック・リスト法のそれぞれに共通な因子が多くみられる。たとえば，質問紙法では，自信・責任（Vacchianoの第Ⅵ因子，水野の第Ⅱ因子，梶田の第Ⅰ因子，保坂の第Ⅲ因子），対人関係（Vacchianoの第Ⅰ，第Ⅱ因子，水野の第Ⅰ因子，梶田の第Ⅴ因子，保坂の第Ⅱ因子），不安（Vacchianoの第Ⅳ因子，水野の第Ⅰ因子，梶田の第Ⅳ因子，保坂の第Ⅰ因子），優越感（梶田の第Ⅱ因子，保坂の第Ⅳ因子）など4因子が共通のものとして考えられる。また，SD法，チェック・リスト法では，誠実性（Smithの第Ⅱ因子，長島らの第Ⅳ因子，中西らの第Ⅰ因子，高木らの第Ⅳ因子），外向性（Smithの第Ⅴ因子，長尾らの第Ⅰ因子，中西らの第Ⅱ因子，高

木らの第Ⅱ因子)，情緒性（長島らの第Ⅱ因子，高木らの第Ⅴ因子）など3因子が共通のものとして考えられる。

各研究の質問紙の項目とSD法の項目の中に，似たようなものが使われているため，それぞれに共通の因子がみられるのは当然といえるが，両者をくらべるとかなりちがったものにみうけられる。このことからも，これらの測定法が，自己概念のちがった側面を測定していることが推測されよう。

Ⅴ．各測定法の位置づけ

保坂(1982)は，質問紙法とSD法の両測定法で，「自分からみた自己像」と「友人からみた自己像」を測定した。そして，その両者自己像の差と精神健康との関係に着目して，両測定法の特較を行なった。その結果から，SD法で測定される自己概念は，より表面的なイメージのようなものであり，質問紙法で測定される自己概念は，それよりも内面的なものではないかと推測している。

また，高垣（1974）は，20答法にあらわれた自己の諸側面の記述のもつ心理的意味について探索した。すなわち，被験者に自分の行なった20答法の反応ひとつひとつに，自己のアイデンティティに深かくかわるものかどうかについて質問した[6]。その結果から，彼は，反応内容の二大分類カテゴリーをなす「社会繋留反応[7]」と「自己叙述反応[8]」を比較して，「後者は，一般に前者よりも重い心理的負荷を持ち，よりしばしば意識され，自己のイメージの構成により本質的で不可欠の部分を荷負っている。」と述べている。

両者の研究からも，SD法，質問紙法，20答法などの各測定法が，それぞれ自己概念のちがった測面を測定している可能性が示唆されており，このうえは，各測定法の位置づけの検討が望まれるところである。ところが，以上で述べてきたような測定法の比較研究により，いくつかの測定法のちがいが明らかにされつつあるのに，それを一歩進めて，各測定法の比較検討を行なって，体系化した研究はいまだみられない。上記3で述べたような相関係数をとる研究がほとんどであり，また，比較検討にしても，ここで述べたような，質問紙法やSD法だけの位置づけや，20答法の反応内の位置づけにとどまっている。そこで本稿では，以下において，これまでの研究をもとにして，質問紙法，SD法，チェック・リスト法，20答法の位置づけについて考察し，ひとつのモデルを提出してみたい。

Ⅵ．考　察

これまでに概観したいくつかの研究をふまえたうえで，高垣（1974）のように，個人にとっての心理的負荷という観点からこの問題をとらえてみると，ひとつの階層的なモデルがうかんでくる。それを図示すると図1のようになる。

すなわち，心理的負荷という，いわば個人にとっての意味の重さからみた自己概念のレベルとして，表層から深層へという階層を仮定してみると，それに対応して各測定法の位置づけがある程度はっきりしてくる。たとえば，「私は男性である」「私は学生である」などの20答法の社会繋留反応は，個人の社会的背景に付随して当然でてくるものであり，個人の心理的負荷からいえば，ある程度共通に，外郭部として位置づけられよう。（もちろん，たとえば，自分が女性であることにこだわりを持っている人や，自分の社会的地位に高いプライドを持っている人などは，例外的にそうした自己概念が，その人にとって重い意味を持つことは考えられるが。）また，「強い—弱い」「陽気—陰気」などのSD法，チェック・リスト法の形容詞の項目で測定されるものは，どちらかといえば，より他者を意識したときの自己の表層イメージとしてとらえられやすく，一方，「私は責任感がある」「私は自己中心的だ」などの質問紙法の項目で測定されるものは，より内面的ないわば自分で自己を意識したときのイメージとして考えられやすい。したがって，保坂（1982）が指摘するように，両測定法による「自分からみた自己像」と「友人からみた自己像」の差の意味するものがちがってくると考えられる。ただし，「私は明るい」といった20答法の反応や，質問紙法の項目も，当然，個人的表層イメージをとらえているものと考えられるし，「暗い」という形容詞をチェックすることが，より内面的な自己概念を意味することを考えられる。従って個人的表層イメージから，より内面的な自己概念にかけては，各測定法が重なって測定可能な部分としてとら

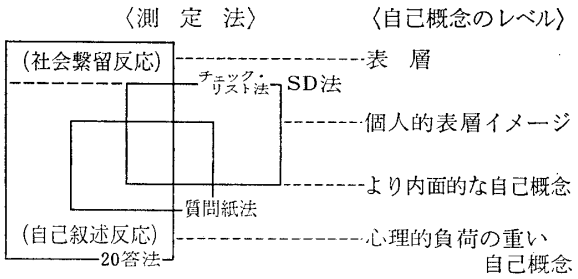

図1

えることができよう。また，「私は非常にプライドが高い」「私はどうしようもない劣等感を持っている」などの20答法にあらわれる自己叙述反応の中には，その個人にとって非常に重要な，心理的負荷の重い自己概念があらわれやすいと考えられる。ここでいう心理的負荷の重い自己概念とは，その個人にとっての自己概念の構成により本質的で不可欠の部分とも言うできものであり，その個人が強く意識している重要な自己であるともいえる。こうした心理的負荷の重い自己概念は，先にも述べたように，20答法の社会繋留反応の中にも例外的にあらわれるし，また，SD 法，チェック・リスト法の形容詞や，質問紙法の項目にひっかかる場合も考えられる。しかし，文章完成法の中で，その個人の持つ“ことば”で表わされた方が，よりはっきりととらえられるだろうということである。

このような各測定法の重なりを無視して，単純化していえば，一番表層に20答法の社会繋留反応にあらわれる，社会や集団的背景に準拠した自己概念があり，次に，形容詞によって測定される個人的な表層イメージともいうでき自己概念がある。さらに，質問紙法によってとらえられる，より内面的な自己概念があり，その中でも特に個人にとって自己概念の構成により本質的で不可欠の部分になっている心理的負荷の重いものが，20答法の自己叙述反応にあらわれると考えることができる。

さらに，このように考えることによって，それぞれの測定法で各層を把握できるようにねらって項目が作れるのではないだろうか。そうした測定法を，テスト・バッテリーとして組み合わせることにより，自己概念を多面的にとらえることも可能だろう。

以上は，ある測定によってあらわされた自己概念が，その個人にとってどれほど意識された，重要なものであるかということをとらえてひきだされたひとつのモデルである。こうしたモデルは，いうまでもなく，今後，具体的な実験などによって検証していく必要があるが，少なくとも現時点でも，異なったレベルの測定法による結果を比較して議論を進めていくことに対する批判にはなりうるだろう。

本稿では，各測定法の位置づけとして，個人にとっての心理的負荷という観点からとらえた，ひとつの階層モデルを提出した。さらにこうした研究が進み，各測定法の比較検討，体系化が重ねられることは，自己概念研究の基礎としてきわめて重要なことであり，今後もこうした研究が続けられることが望まれる。

（指導教官　佐治守夫教授）

注

1) 本稿でいう自己概念とは，個人が自分自身をどのように感じ，考えているかという自己像の総体を意味する。北村（1977）の3つの着眼点に従えば，(1) 客体としての自己であり，(2) 個人の意識的事実として体験されているものであり，(3) 環境に対する関係交渉においてとらえられているものであるといえよう。
2) それぞれの段階の枚数は，1枚(1)，4枚(2)，11枚(3)，21枚(4)，26枚(5)，21枚(6)，11枚(7)，4枚(8)，1枚(9)である。
3) Bills; Vance & McLean (1951) では，両者の高い相関（−.77）が報告されている。
4) 項目内容ののっていないものや，小学生・高校生だけを被験者としているもの（Piers; 1964, Rentz ら; 1967, Monge; 1973など）は対象からはずした。
5) マイナスは逆転項目。
6) 「日頃の行動の仕方にどの程度影響しているか。」「日頃，しばしば意識するか。」，「それをとってしまえば『自分らしさ』あるいは『自分のイメージ』がくずれてしまうと思のか」など。
7) 自己を社会集団への所属，社会的役割に関連させて定義しているもの。性・学年・出身地など。
8) さまざまな側面にわたる自己の属性。性格・容姿・生活感情など。

引用・参考文献

Achenbach, T. and Zigler, E. 1963 Social competence and self-image disparity in psychiatric and non-psychiatric patients, J. Abn. Soc. Psy., 67, 195-205.

Altrocchi, J., Parsons, O.A. and Dichoff, H. 1960 Change in self-ideal discrepancy in repressors and sensitizers, J. Abn. Soc. Psy., 61, 67-72.

東　貞夫 1975 発達的イメージの測定　広島大学教育学部紀要 24, 273-280.

Bills, R.E., Vance, E.R. and McLean, O. 1951 An index of adjustment and values, J. Consult. Psy., 15, 257-261.

Block, J.A. 1956 A comparison of the forced and unforced Q-sorting procedures, Edu. Psy. Measurement, 16, 481-493.

Bugental, J.F.T. and Zelen, S.L. 1964 Investigations into the self-concept: Ⅲ. Instructions for the W-A-Y method, Psy. Report, 15, 643-650.

Butler, J.M. and Haigh, G.V. 1954 Change in the relation between self-concepts and ideal-concepts consequence upon client-centered counseling. Rogers, C.R. and Dymond, R.F. (ed.), Psychotherapy and Personality Change, 友田不二夫（編訳） 1967 パーソナリティの変化　岩崎学術出版

Caplan, S.W. 1957 The effect of group counseling on junior high school boys' concepts of themselves in school, J. Counsel. Psy., 4, 124-128.

Coleman, J., Herzberg, J. and Morris, M. 1977 Identity in adolescence: Present and future self-concept, J. Youth and Adolescence, 6, 63-75.

Coopersmith, S. 1959 A method for determining types of self-esteem, J. Abn. Psy., 59, 87-94.

Cowen, E.L. and Tongas, P.W. 1959 The social desirability of trait descriptive terms: Applications to a self-concept inventory, J. Consult. Psy., 23, 361-365.

Crites, J.O. 1965 Tests review, J. Counsel. Psy., 12, 328-

331.
Cronbach, L.J. and Goldine, C.G. 1953 Assesing similarity between profiles, Psy. Bulletin, 50, 456-473.
Engel, J.M. 1959 The stability of the self-concept in adolescence, J. Abn. Soc. Psy., 58, 211-215.
Flaherty, J.F. and Dusek, J.B. 1980 An investigation of the relationship between psychological androgyny components of self-concept, J. Pers. Soc. Psy., 38, 984-992.
藤原喜悦 1969 Q技法による青年の自我構造の研究 東京学芸大学紀要 20, 36-43.
Gough, G.H. 1960 Adjective Check List as a personality assessment research technique, Psy. Report, 6, 107-122.
Hess, A.L. and Bradshow, H.L. 1970 Positiveness of self-concept and ideal-self as a function of age, J. Genet. Psy., 117, 57-67.
堀尾治代 1981 自己概念の測定と評価 中西信男・鑪幹八郎（編） 自我・自己 心理学 10 有斐閣双書
保坂 亨 1981 Q分類による自己概念の研究 東京大学教育学部教育相談室紀要4，119-130.
保坂 亨 1982 青年期の自己概念：男子青年における自己概念と自己受容性，自己開放性の関連について 東京大学大学院教育学研究科修士論文
星野 命 1958 自己態度 (self-attitudes) の比較研究（その1）日本心理学会第22回，324-325.
Jones, A. 1956 Distribution of traits in current Q-sort methodology, J. Abn. Soc. Psy., 53, 90-95.
Jorgensen, E.C. and Howell, R.J. 1969 Changes in self, ideal-self correlations from 8 through 18, J. Soc. Psy., 79, 63-67.
Kahl, L.R., Kulka, R.A. and Klingel, D.M. 1980 Low adolescence self-esteem leads to maltiple interpersonal problems: A test of social-adaptation theory, J. Pers. Soc. Psy., 39, 496-502.
梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東大出版会
加藤陸勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ 東大出版会
加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念の関係 教育心理学研究 28, 72-76.
Katz, P. and Zigler, E. 1967 Self-image disparity: A developmental approach, J. Pers. Soc. Psy., 5, 186-195.
菊地登紀子 1970 青年期における自己観（I）：私立女子高生における発達的諸相 岩手大学教育学部教育年報 30, 57-76.
北村晴郎 1977 自我の心理 誠信書房
小島秀夫・木場深志 1972 合宿セミナーの効果測定 金沢大学保健管理センター学生相談室（編） 第3回精神的健康増進のための合宿指導達告書 22-28.
Kokens, B. 1974 Grade level differential in factors of self-esteem, Developmental Psy., 10-6, 954-958.
Kuhn, M.H. and McPartland, T.S. 1954 An emprical investigation of self-attitudes, Amer. Soc. Review, 19, 68-76.
Laforge, R. and Suczuk, R.F. 1955 The interpersonal dimensions of personality, Ⅲ. An Interpersonal Check List, J. Pers., 24, 94-112.
Medinnus, G.R. and Curtis, F.J. 1963 The relation between maternal self-acceptance and child acceptance, J. Consult. Psy., 27, 542-544.
水野正憲 1976 創造的態度・保守性・自尊心 岡山大学教育学部研究集録 44, 1-17
Montemayor, R. and Eisen, M. 1977 The development of self-conception from childhood to adolescence, Developmental Psy., 13, 314-319.
村瀬季雄・下仲順子・新井弘子 1974 文章完成法に表われた女子中学生の人格発達 教育心理学会第16回 236-237.
長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1966 自我と適応についての研究(1)：Self-Differential 作製の試み 東京教育大学教育紀要 12, 85-106.
中西信男・那須光章・浅田尚子 1978 青年期の自我構造に関する研究 相談学研究 11, 1-9.
佐治守夫 1961 人格心理学におけるひとつの問題：心理学的自己について 相良守次（編） 現代心理学の諸問題 誠信書房 159-215.
佐治守夫・竹村和子 1957 Qテクニックによる適応の研究(1), (2) 日本心理学会第21回 323-324.
斎藤久美子 1959 自己意識の分析による人格適応性の研究 心理学研究 30, 35-43.
佐藤 正 1768 青年期における自我変動過程の研究 東京学芸大学紀要 19, 50-63.
Smith, P.A. 1962 A comparison of three sets of rotated factor analytic solutions of self-concept data, J. Abn. Soc. Psy., 64, 326-333.
Strong, D.J. 1962 A factor analytic study of several measures of self-concept, J. Counsel. Psy., 9, 64-70.
Strong, D.J. and Feder, D.D. 1961 Measurement of self-concept: A critique of the literature, J. Counsel. Psy., 8, 170-178.
杉浦喜久代 1978 文章完成法による自己概念の分析 教育心理学会第16回 234-235.
砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究 26, 215-220.
高垣忠一郎 1974 TST にあらわれた反応の心理学的負荷について 京都大学教育学部紀要 20, 207-227.
高木秀明・加藤隆勝 1979 青年期における自己概念の発達的変容(1), (2) 日本心理学会第43回 410-411.
Turner, R.H. and Vanderlippe, R.H. 1958 Self-ideal congruence as index of adjustment, J. Abn. Soc. Psy., 57, 202-204.
Vacchiano, R.B. and Strauss, P.S. 1968 The construct of validity of the Tennessee Self-concept Scale, J. Clin. Psy., 24, 323-326.
Williams, J.E. 1962 Changes in self and other perceptions following brief educational-vocational consulting, J. Consult. Psy., 9, 18-30.
Winkler, R.C. and Myers, R.A. 1963 Some concommitance of self-ideal discrepancy measures of self-acceptance, J. Counsel. Psy., 10, 83-86.
Worchel, P. and McCormic, B.L. 1963 Self-concept and disclosure reduction, J. Pers., 31, 588-599.
Wylie, R.C. 1974 The self-concept: A review of methodological considerations and measuring instrument (Rev. ed) Vol. 1, Lincoln, Nebraska Univ. of Nebraska Press.
吉川房枝 1960 青年期における自我の形成 教育心理学研究 8, 26-37.
芳川玲子 1982 対人恐怖症の自己概念に関する研究 東京大学教育学部教育相談室 5，129-141.
Zigler, E., Balla, D. and Watson, N. 1972 Developmental and experiential determinants of self-image disparity in institutionalized and non-institutionalized retarted and normal children, J. Pers. Soc. Psy., 23, 81-87.